

合衆国中西部の四季

田中 博*

日本に比べ、アメリカの大学院生には結婚している人が多いようなので、平均結婚年齢は何歳くらいか研究室の秘書嬢に尋ねてみたことがある。秘書嬢は暫く考えた末、アメリカに平均はないと答えた。つまり、人種、言語、文化、風俗、そして気候に至るまで雑多な国が合衆国であり、平均を考えることが無意味だということであろう。合衆国の数カ所を見ただけで合衆国全体を語るなということをよく耳にするのもそのためであろう。ここでは、私の住むミズリー州を中心とするアメリカ中西部では、とあらかじめ断っておく。気候の違いは発想や常識、そして価値感に少なからず影響を及ぼすと思うので異なる気候に住む人々との相互理解のためにも、以下に中西部の四季をかいつまんで紹介したい。

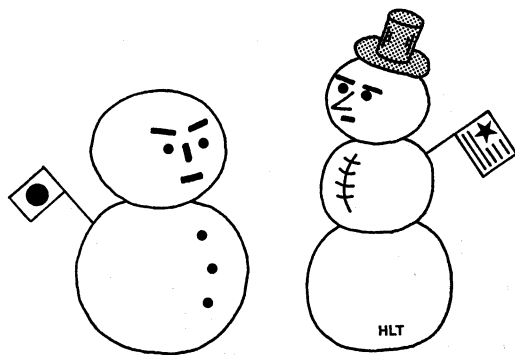
日本では、早春に先づ梅が咲き、それから暫くして桜…という具合に、花々が順を追って咲き誇り、春の深まりを情緒的に楽しむことができるが、大陸気候の典型とも言える中西部では、厳寒の冬から突然のように春が訪れる。そのため、dogwood や redbud などの落葉樹は暖かい日が数日続くと大急ぎで一勢に芽を吹き、花を咲かせる。季節に遅れまいと慌てふためいているようなその様子は実に愉快に感じられる。やがて severe storm の季節が訪れる。西の空に帯状に組織化された巨大な黒雲が現れたかと思うと30分も経たないうちに電が降り出し、突風とともに一寸先も見えなくなるような豪雨が始まる。しかし、小1時間も降り続くと乾燥したさわやかな風が変わり、青空がのぞき始め、同時に濡れていた道路はたちまちのうちに乾いてしまう。これが中西部の雨の降り方で、そのあっけらかんとしたさわやかさは中西部の住民の人柄と通じるものがある。

夏の初めには陸性螢が広い芝生一面に飛び交う。螢をこちらでは firefly(光る蠅)と呼ぶのには興ざめするが、その明るさは源氏螢の比ではなく、車のヘッドライトの中でも輝いて見える程である。特に、群れをなしている立木などは初夏のクリスマスツリーと化してしまう。真

夏には、気温が 45°C まで上昇することがあり、猛暑に弱い老人達の中に死者の出ることが多い。コラム「世界の異常天候とその影響評価」を見ると毎月のように合衆国のどこかで異常が報道されているように思うが、もともと天候変化の激しい中西部では、45°C の暑さもさほどの異常とも感じられない。

秋になり、落葉樹が一斉に紅葉する様は実に美しい。夏が暑いほど、そして急激に寒くなる年ほど彩鮮かな紅葉になると聞けるが、なる程、中西部の気温降下は著しい。秋の終わりには、着氷性の雨 (freezing rain) が降ることがある。停滞前線に伴う上層の乱層雲が雨をもたらし、下層に進入した寒気の移流がそれを凍らせる。気温の逆転が地上で氷点下になる限られた地域にだけ生じる現象である。この時、既に落葉した樹木の枝などに付着した過冷却の雨滴が無色透明の状態で凍り、それが成長してどんどん太くなるので林も街路樹も芝生もやがてガラス細工のようになる。それは幻想的とも言える美しさだが、屋外駐車場の車は鍵を差し込むことも、ドアを開けることもできなくなり、出勤前に悪戦苦闘を強いられることになる。土産物店などでよくガラスの中に浮いた花などを見るが、ひどい時にはまさにガラスの中に浮いた車ようになってしまう。

真冬には、気温が -30°C まで下がることもある。特にブリザードが吹き荒れる時には、体感温度は -50°C



* H.L. Tanaka, ミズリー大学, USA.

にまで下がり、これまた死者が続出する。その時の 500 mb 天気図を調べると、カナダ上空の極渦が中西部上空まで南下している。気象学的北極が中西部に存在すると解釈できる。そうかと思えば、1月に20°Cを超えることもあり、気温に敏感な学生達はたちまち半袖姿で外を歩き回る。アメリカに平均はないということが、こういうところにも言えるようである。そう言えば、彼等は真冬でも厚いダウンジャケットの下に半袖のTシャツ1枚ということが多いようだ。キャンパス内の建物の中はたいていセントラルヒーティングで汗ばむ程に暖かいからである。雪が積もると彼等は外に出て、snow angel(両手を広げて雪の中に倒れ、手をパタパタと上下に動かして跡をつける)や snowman(雪だるま)を造ったりする

が、彼等の雪だるまは雪玉を3つ重ねて造る。東洋人と比べ、大きい胸、くびれた腰、そして大きいお尻を持つ彼等には、雪だるまの胴体として雪玉2個が必要と解釈すべきだろうか。

2月2日は、グランドホッグデーである。この日が好天で、冬眠から覚めて土の中からはい出してきたグランドホッグといういたちに似た小動物が、地上の自分の影に驚いて穴の中に戻ってしまうと春の訪れはまだ遠く、逆に、その日が曇っていたら春は近いと伝えられている。天候変化の激しい中西部であるが、比較的穏やかに一年が過ぎてくれることもある。果たして今年はどうな一年となるのであろうか。

(1987年1月20日)



D. Tolmazin 著
ELEMENTS OF
DYNAMIC
OCEANOGRAPHY

181頁 1985年 Allen & Unwin Inc.
4,540円

著者はコネチカット大学海洋科学部準教授で、文字どおり海洋力学の基礎を書いた本であるが、内容は海流の物理である。本文はわずか169頁で内容は次のとおり。

1. 海洋大気相互作用 2. 海流研究の方法 3. 海流の原因 4. 大洋または海における水のじょう乱と回転 5. 表面流の西岸強化 6. 反対流と小さなうず 7. 深海流 8. 海流と気候。本書に書かれていること自体は英文書を読まずとも、例えば永田豊「海流の物理」(講談社ブルーバックス)を読めばことが足りそうである。教科書として書けばこうなるということだろう。一応 undergraduate students 用としていながら、偏微分やベクトル記号が出てくる。この辺が本書の書評(アメリカ気象学会誌1985年11月号)を書いたアナポリス海軍大学校海洋学部ウィリアムス教授のお気に召さぬところであったらしい。アメリカのテキストは気象学書でもそうだが、読者対称をはっきりさせて、それなりの数学を使うことが守られているようである。一般に、日本ではむづかしい専門書か通俗解説書であって、大学の undergrad-

uate 用のテキストというのとはなかなか見当たらない。(最近、放送大学用テキストにはなかなか立派なものがある。)

さて、最後の章「海流と気候」の中に、「世界の大洋と氷河時代」の節があり、1万8千年前の北半球8月における表面海水温度と氷のひろがり、氷の高さと陸地のアルベドの世界地図が一頁大に掲げられてあり、また現在との偏差図もある。さらに、本書はロシアの文献を多く引用しているが、「地域の気候改造」の節では Budtolaev project というのがある。これは、津軽海峡と宗谷海峡にダムをつくり、間宮海峡を改造して暖流を北上させ、日本海とオホーツク海北西部をあたため、ロシアの沿岸を暖くしようというものである。同地域の海流と水温分布について現況図とプロジェクト完成後の分布図が載せられているのには驚く。3頁にわたってのべられているが、最後はゲーテの言葉で結んである。いわく「自然は常に正しく、常に公明正大である。過失と間違いは人間のあり方からおこる。」

前述の書評者は二、三の記述の誤りを指摘していたが、私は誤値か計算ミスか、数字に納得のいかない点があった。とにかく、横幅のひろい読みやすい組み方で、図版も非常に多く、親しみやすい綺麗な本である。気象力学入門書を読む程度の人向きで、著者の序文にもあるとおり気象学者のための海洋学書ともいえる。

(島田守家)